

福島県双葉郡浪江町
狐塚古墳測量調査報告

辻秀人・新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜

調 査 体 制

調 査 期 間	平成 23 年 2 月 25 日～ 3 月 9 日
調 査 担 当 者	辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
調 査 員	新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜（3 年生） 鹿野恵美・佐々木拓哉・成田 優・服部芳治・松本尚也 森田彩加・横田竜己・佐藤香織・星野剛史（2 年生）
土 地 所 有 者	鈴木安恵・鈴木守 東北電力株式会社 浪江小高原子力準備本部（敬称略）
調 査 協 力	浪江町教育委員会 舩倉 勲・横山精一・荒 淑人・荒 麻美・大谷 基・大谷静香 三瓶秀文（敬称略）

序 章 調 査 の 目 的

第 1 節 調 査 の 目 的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県浜通り地方についてはこれまでに南相馬市原町区の桜井高見町遺跡の発掘調査(辻他 1996)、南相馬市小高区の歓請内古墳の発掘調査(辻 2011)を実施し、同桜井古墳群上洪佐支群 7 号墳の発掘調査(鈴木、吉田 2001)の支援を行ってきた。福島県浜通り地方の古墳時代の様相についてはこれまでに原町市教育委員会(現南相馬市教育委員会)による桜井古墳の発掘調査(荒他 2002)や法政大学による浪江町本屋敷古墳群の発掘調査(伊藤玄三他 1985)などにより明らかにされてきた。そのため、狐塚古墳の測量調査はこれまで不明であった浪江町棚塩地区の古墳時代の様相を解明することを目的として実施した。

引用文献(年代順)

- 伊藤玄三他 1985 年 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
辻 秀人他 1996 年 『桜井高見町 A 遺跡発掘調査報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第 12 集
鈴木文雄、吉田陽一 2001 年 『桜井古墳群上洪佐支群 7 号墳発掘調査報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第 27 集
荒 淑人他 2002 年 『国史跡桜井古墳保存整備事業報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第 31 集
辻 秀人他 2011 年 「福島県南相馬市小高区 歓請内古墳発掘調査報告」 『歴史と文化東北学院大学論集 第 47 号』 pp.1～91 東北学院大学学術研究会

第1章 古墳の立地

第1節 古墳の位置と周辺の地形

浪江町は海岸平野と山地で構成されており、多くの地域は阿武隈高地の山地であり、平地は太平洋に面する海岸平野である、町の中央を請戸川と高瀬川が東流し、海岸近くで合流して太平洋に注ぐ。両河川により比較的広い沖積地が形成されており、沖積地の北側、南相馬市小高区との境と南側、双葉町との境は東西方向にのびる丘陵がある。

狐塚古墳は福島県双葉郡浪江町大字棚塩字狐塚に所在する。請戸川（通称、室原川）・高瀬川が合流する地域の北方に東西に延びる段丘上に立地している。古墳からは両河川が形成した沖積地を一望しうる位置にある。

第2節 歴史的環境

狐塚古墳の所在する丘陵上には多くの古墳・集落遺跡が知られており、狐塚古墳の西約2 kmに本屋敷古墳群がある。本屋敷古墳群は伊藤玄三氏を中心とする法政大学考古学研究室により3年間にわたって発掘調査され（伊藤玄三他 1985）、前方後方墳と方墳で構成される古墳時代前期の古墳群と中期の円墳の様相が明らかにされた。古墳群の主墳、本屋敷1号墳は現在のところ東北地方最古段階の古墳の一つと考えられている。

堂の森古墳は狐塚古墳の西約600 m、北幾世橋字堂の森に位置する。狐塚古墳と同じ段丘上にある。全長は51.1 m、後円部墳丘直径36.4 m、前方部長さ20.7 mを測る大型前方後円墳である（福島県立博物館 1987）。未調査であるため、築造時期等詳細は不明である。後円部に比較して前方部が小さい特徴があり、中期の古墳である可能性が高いと考えられる。狐塚古墳と堂の森古墳の間には円墳で構成される安養院古墳群があり、一連の古墳群を形成する可能性がある。

狐塚古墳の西側から北西にかけて、段丘上の平坦面に鹿屋敷遺跡が広がる。遺跡の中心部が1986年に発掘調査が実施され、古墳時代から奈良・平安時代に及ぶ多数の竪穴住居跡等が検出された（浪江町教育委員会 1988）。また、町道に関わる調査の発掘区では、古墳時代の住居跡や古式土師器などが出土した（浪江町教育委員会 1997）。その他に早期末葉、弥生時代中期の資料が認められる。鹿屋敷遺跡は、この地域の中心的な大規模集落であり、古墳時代にも多くの竪穴住居が分布している。狐塚古墳、安養院古墳群、堂の森古墳はこの集落を営んだ勢力によって築造された可能性が高い。

引用文献

- 伊藤玄三他 1985年 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
福島県立博物館 1987年 「浪江町 堂の森古墳」 『古墳測量調査報告書』
福島県立博物館調査報告書 第16集』 pp.1～3 福島県立博物館
浪江町教育委員会 1988年 『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』
浪江町埋蔵文化財調査報告第6冊
浪江町教育委員会 1997年 『鹿屋敷遺跡試掘調査報告書』
浪江町埋蔵文化財調査報告 第11冊



第1図 狐塚古墳周辺遺跡分布図

第2章 測量調査成果

第1節 後円部の調査

①後円部墳頂平坦面

東西約 10.8m、南北方向は平坦面南側が一部壊されているため確認できないが、約 10 mと推定される。平坦面南部が円形に大きく掘り取られているため平坦面の形状ははっきりしないが、おおよそ正円形を呈していたと思われる。墳頂部の標高は平坦部南西部において 25.25 mを観測できた。地表観察では埋葬施設の存在を示唆する痕跡は認められなかった。掘り取られた部分は深さ約 1 m程度で、埋葬施設を大きく破壊しているとは思われない。遺物は発見できなかった。

②後円部墳丘

墳丘南側は標高 23.50 m付近から平坦面にかけて大きな円形な掘り込みと小型の掘り込みが二つ見られる。道路に関わる掘削が標高 20.75 m付近まで及んでいるが墳丘端は 21 m付近と見られ、墳丘端には達していないと判断された。

墳丘西側の墳丘端には南側と同様に標高 21 m付近と見られる。墳丘西側に古墳南側の道路から分かれて伸びる道路が造られており、墳丘西側から北側にかけて墳端が一部削られていると見られた。

墳丘の北側に広がる平坦な場所はかつて畑として使われていたため、墳丘北側の裾部が畑造成の際に削られ、墳丘端はほぼ壊されている。畑造成による墳丘の削平はくびれ部付近で最も大きく、墳丘下部にまで達している。墳端は標高 21 mから 22 mの間にあったと推定される。

後円部墳丘は全体として遺存状況は良好であるが、古墳西側の進入及び北側の畑造成にともない、墳端部は南側を除いて削られている。墳丘等高線の密度に大きな変化はなく、測量の段階ではテラスは確認できなかった。後円部直径約 26.5m、比高約 4 mを測る。

第2節 前方部の調査

①前方部墳頂平坦面

前方部墳頂平坦面は後円部斜面との間に明確な傾斜変換線を認めることが出来ず、スロープ状に緩やかに後円部に接続する。後円部墳頂平坦面に対して前方部墳頂平坦面は非常に低い位置にあり、比高約 3 mを測る。くびれ部付近では古墳北側の畑造成で削られた土が前方部墳丘上に盛り上げられ、一部墳頂平坦面にまで達している。墳頂平坦面は後円部との接続部分が最も狭く、低い。前方部先端にむけて徐々に幅広く、高くなっていき、前方部斜面に接続する。平面形は遺存状況の良い南部から推測すると東西に細長い台形を呈したと思われる。幅は後円部との接続部で約 4.7 m、前端では平坦面北東部の土盛りにより傾斜変換線がはっきりしないが約 10 mと推定される。接続部は標高 22.25 m、前方部斜面に近い最高所で 23.00 mを測る。前方部前端で周囲との比高は最大で 1.25 mである。

②前方部墳丘

墳丘北側は、古墳北側の畑造成で削られた土が盛り上げられ、本来の斜面の姿を残していない。前方部北東角にとりつく土手状の盛り上がりも同様に畑の造成により、後世に作られたものである。

前方部墳丘東側、前方部前端斜面は北側を除いて遺存状態は良好であった。墳丘斜面は緩やかで、墳端も明瞭ではなかったが、主軸上で 22.25 m、斜面南側で 22.75 m の等高線付近と見られる。

前方部墳丘南側は遺存状態は良好で、本来の墳端を保っている。墳丘斜面は緩やかで、事前地形との識別が難しく、墳端ラインを確定できなかった。等高線の流れから見て標高 21.00 m 付近に墳端があると推定された。

前方部北側は全体に畑の造成に関わる削平、盛り土によって変形されているがその他は良く本来の姿を保っていた。長さは 26 m 前後で後円部直径とほぼ等しい。前方部前端 15 m 前後と推定される。全体に「ハ」の字状に開く台形を呈している。テラスは後円部同様に今回の調査では確認できなかった。

(新沼裕伸、熱海泰輔、千葉優菜)



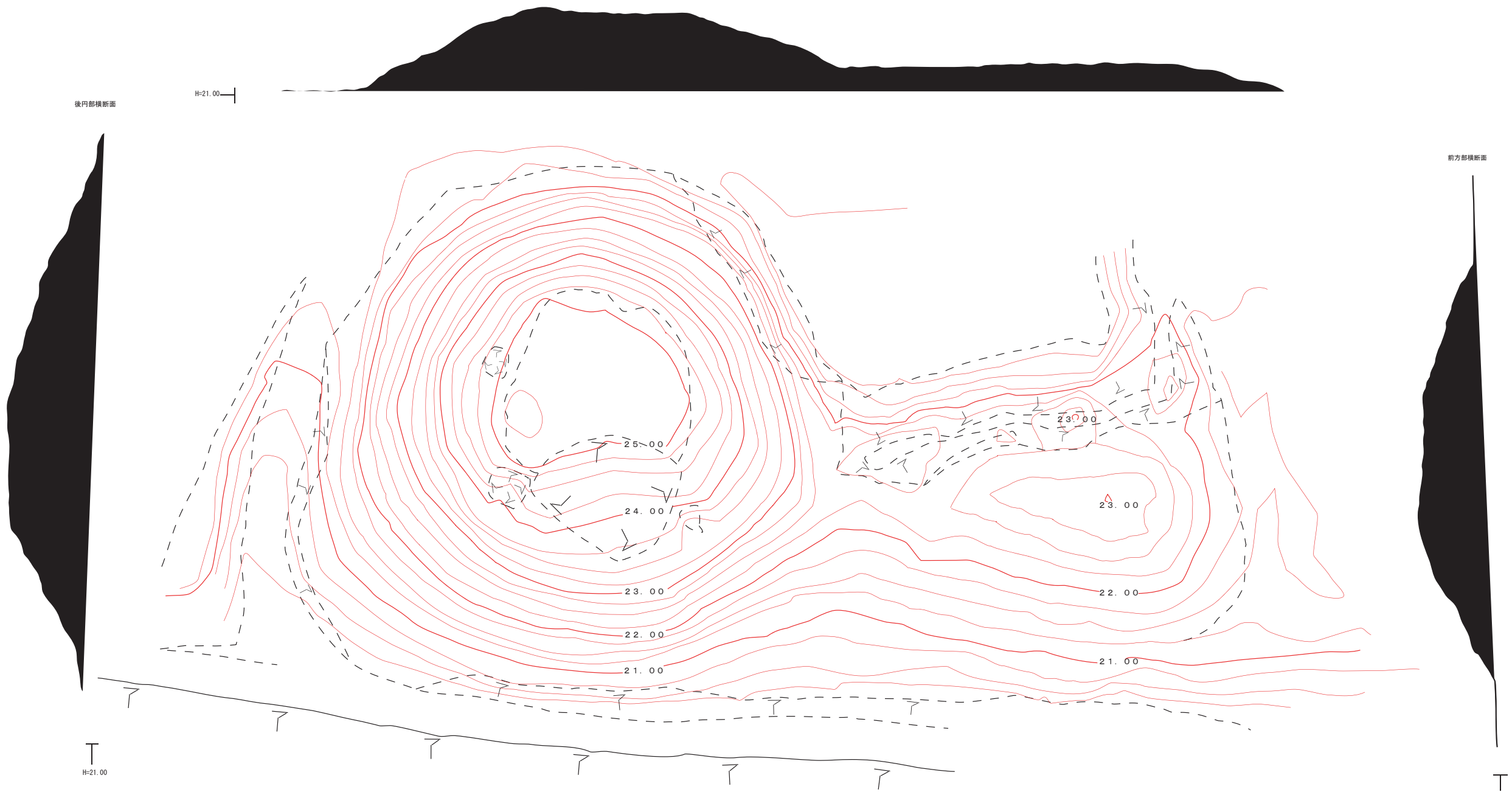
狐塚古墳全景 前方部から後円部を望む

古墳断面

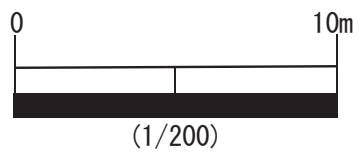
後部断面

H=21.00

前方部断面



第2図 狐塚古墳測量図



第3章 まとめ

測量調査の結果、狐塚古墳は丘陵頂部の地形を利用して築かれた東北地方においては比較的大型の前方後円墳であることが判明した。古墳は前方部を東に東西方向を主軸として築造されている。全長約46 m、後円部直径26.5m、後円部比高約4 m、前方部長さ26 m前後、前方部前端15 m前後、前方部比高1.25mを測る。全体の形状は後円部に比較して前方部の幅がせまく、細長い点に特徴がある。浪江町内では同じ丘陵の東側にある堂の森古墳（福島県立博物館 1987）に次ぐ規模である。

古墳の北側にはかつて畑が造成されていたため、墳丘北側は後円部北東部からくびれ部、前方部にかけて一部削られており、前方部では削られた土が古墳墳丘に盛られているために本来の姿を保っていない。また、後円部墳丘平坦面の南側には小さくぼみがあり、掘削された痕跡と見られた。その他の部分はほぼ損傷はなく、保存良好である。

狐塚古墳の特徴は後円部に比べて前方部が低いことにある。前方部の比高はわずか1.25 mであり、墳丘南側の墳端はきわめて不明瞭であった。古墳の正確な規模は発掘調査で明らかにする必要がある。

古墳の後円部直径と前方部長さはほぼ近い数字であり、全体に前期古墳に近い様相である。西側約600 mにある堂の森古墳と比較すると前方部長さはほぼ等しく、後円部直径が10 m近く小さい。狐塚古墳の後円部をやや拡大すると堂の森古墳の姿になるという関係で、両者は良く似ており、中間にある安養院古墳群（浪江町教育委員会 2007）と合わせて一連の古墳群を形成すると言えよう。

古墳群は東西にのびる丘陵上の南側に分布している。丘陵中央の平坦面には古墳時代から古代にかけての大規模な集落、鹿屋敷遺跡があり（浪江町教育委員会 1988）一連の古墳群の造営は鹿屋敷遺跡を中心とする集落により実施されていたと考えられる。

古墳の築造時期は、墳丘に遺物が確認できず、明確にはできない。堂の森古墳はこれまで古墳時代中期と推測されており、狐塚古墳は堂の森古墳よりもやや古い様相をもっており、これよりやや古く古墳時代前期の可能性を考えておきたい。

築造時期も含めて、狐塚古墳の本来の姿は発掘調査で明らかにする必要がある。しかし、残念ながら福島第1原発の事故により、近い未来に発掘調査を実現することは困難になってしまった。大震災、原発事故の直前に測量調査を実施でき、古墳の外形を明らかにできたことはわずかな救いではあるが、狐塚古墳の実態解明、保存活用を含め、将来に委ねられることになった。

浪江町ひいては大震災により被災し、原発事故により放射線の影響を受けたすべての文化財が除染、修復、保存され地域の共有の財産として活用されることを祈りたい。

（辻 秀人・新沼裕伸、熱海泰輔、千葉優菜）

引用文献

- 福島県立博物館 1987 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集
浪江町教育委員会 2007 『浪江町文化財分布図』
浪江町教育委員会 1988 『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』浪江町埋蔵文化財調査報告第6冊

謝辞

狐塚古墳の測量調査にあたり、古墳所在地を所有されます、鈴木守氏、鈴木安恵氏、鈴木明氏、東北電力株式会社様には調査を快諾して頂き、浪江町教育委員会には調査に全面的に御協力いただきました。心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたりまして万端の手配をいただきました浪江町教育委員会伊東重幸氏、調査にご協力下さいました東北電力株式会社浪江・小高原子力準備本部松原仁氏、宿舎のご提供をいただきました南棚塩区长榊倉勲氏、土地を借用させていただきました浪江町町会議員横山精一氏の皆様に御礼を申し上げます。

2011年3月9日午後、古墳上で夏の発掘調査の打合せをしている時に大震災の前触れとなる大きな地震に遭遇しました。私どもは9日のうちに仙台にもどりましたので、被災を免れましたが、お世話頂いた地域の皆様が東日本大震災で被災されたことを知り、胸が痛い思いしております。亡くなられた皆様に謹んで哀悼の意を表しますと共に、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。



古墳南側の道路から後円部墳頂を望む



後円部墳頂から前方部



前方部全景